

Words for Music Perhaps における 有機的イメージと二律背反の溶解

三 木 菜緒美

序

W. B. Yeats (1865-1939) の後期の詩集 *Words for Music Perhaps* (1929-32) は、Crazy Jane を扱った7編の詩と Old Tom を扱った3編の詩、その他15編の計25編の短詩で構成されている。Yeats は、この詩集を収めて出版した *The Winding Stair and Other Poems* (1933) の序文で “in the spring of 1929 life returned as an impression of the uncontrollable energy and daring of the great creators”¹ と記し、病を患っていたにもかかわらず、3年に亙る執筆期間の中で “[I was] always keeping the mood and plan of the first poems” と、いかに自分が作品を書く意欲に満ち、知的興奮を覚えていたかを訴えている。

彼の作品に関しては Richard Ellmann, W. H. Auden をはじめ、様々な批評家が高い評価を与えているが、T. S. Eliot は Yeats を “the poet of middle age”² と称し、特に後期の作品に “a great and permanent example of what I have called Character of the Artist: a kind of moral, as well as intellectual, excellence” を見出している。また作品の “impersonality” という点に関して、Eliot は Yeats のことを “the poet who, out of intense and personal experience, is able to express a general truth; retaining all the particularity of his experience, to make of it a general symbol”³ と評している。実際、Crazy Jane は Cracked Mary と呼ばれていた実在の人物がモデルとなり、また、その他の詩においても Yeats が見聞きした個人的経験を詩作の題材にしているという点から “personal” なものといえる。しかし、そういった経験の中に何か普遍的真理を見出し、詩という形で表現した *Words for Music Perhaps* は、Yeats が執筆する際に意図したように “all emotion” を描いていながら、

“all impersonal” なものを創造した作品群といえるだろう。⁴ この詩集における大きな特徴の一つとして、作品のほとんどに特定のペルソナや語り手が設定され、押韻による象徴的イメージのつながりが見出される。そして Daniel Hoffman も指摘しているように、⁵ 一見無意味な、また誰のものとも言いえないリフレインが次第に真実味を帯びて響いてくるというバラッド的手法が多く用いられている。これは一風変わった内容のこの詩集に、善悪を取捨する一面的モラルでは解明できない異質なものを自然に取り込むことを容易ならしめ、多面的な見方を示唆していると考えられるのである。

本論では、まず Crazy Jane に関する詩を中心に光と闇のイメージをたどり、象徴的に表わされる彼女の愛について論じていく。併せて、本詩集における有機的イメージと時間の意識について言及し、詩集全体に流れるテーマについて考察する。

I

この詩集の中で最初に書かれた詩 “Mad as the Mist and Snow” では「知性」と「狂気」が次第に識別しがたいものとなっていく過程が描かれる。まず第一連において、自分たちの外の世界に存在しているものとして「狂気」は捉えられる。

Bolt and bar the shutter,
For the foul winds blow:
Our minds are at their best this night,
And I seem to know
That everything outside us is
Mad as the mist and snow. (1-6)

外では “the foul winds” が吹き荒れ、すべてが “*Mad as the mist and snow*” なので扉を閉ざし、それを締め出そうとしている。なぜなら、自分たちの心は今最高の状態なのだからと歌われる。つまり、ここでは「家」という具体的な事物で内と外との隔たりを作り、外の世界に対する否定的な態度が見られるのである。続いて、第二連では内にある「知性」と外の世界の「狂気」というはっきりした区別が提示される。

Horace there by Homer stands,
 Plato stands below,
 And here is Tully's open page.
 How many years ago
 Were you and I unlettered lads
Mad as the mist and snow. (7-12)

ここで挙げられる Horace や Homer といった昔の偉大な詩人たちの本は、語り手が吸収してきた「知性」の象徴である。そして、その存在するところは家の中であり、家の中と外との区別は「知性」と「狂気」の領域の区別と重なる。しかし、10行目以降、今でこそ年を重ね、知性を身につけたが、「若い頃は自分たちも “*Mad as the mist and snow*” であった」と自分たちの内に外の世界と同じ「狂気」を見出し、第一連の否定的態度が変化していく。

You ask what makes me sigh, old friend,
 What makes me shudder so?
 I shudder and I sigh to think
 That even Cicero
 And many-minded Homer were
Mad as the mist and snow. (13-18)

ついに第三連において、「知性」の象徴であったはずの Cicero や Homer の中でも “*Mad as the mist and snow*” を見出し、「知性」と「狂気」の識別し得ない交じり合った状態が不思議な感覚をもって描かれる。

このように知性と狂気、若さと老い、愛と憎しみといった両極を捉える二律背反の境界は、Yeats の手にかかると次第に溶けてゆき、相対立するもののすべてが分けがたいものとして捉えられるようになる。これはこの詩集全体の基調をなすものであり、このことを最も明確に表現しているのは “Fair and foul are near of kin. / And fair needs foul” (“Crazy Jane Talks with the Bishop,” 7-8) という Crazy Jane の言葉だろう。そして、この言葉は直ちに Shakespeare の *Macbeth* の冒頭場面での3人の魔女の言葉 “Fair is foul, and foul is fair” を思い起こさせるのである。知性と狂気が溶け合い、また狂気と魔術的力が交じり合うことで語られていくこの詩集において、それぞ

れの言葉は一編の詩の枠を超えた象徴的意味とその有機的なつながりを持つようになる。それにより、想像力や情調を何よりも重要と考える Yeats が一面的モラルと理性の抑制から解放された声を発し、目に見えない真実を描こうとしていると考えられる。⁶

II

Crazy Jane を扱った詩群において、彼女は老いた娼婦として描かれ、気が振れていることが前提であるため、Bishop が主張するような肉体を軽視して魂のみを崇めるキリスト教的信仰や常識というものは通用せず、一般的日常生活の枠をはみ出していることが良しとされる。また Jane の声は率直かつ大胆であり、リズムカルな調子により、肉体に根ざした独特の思想世界を創り出している。さらに、彼女自身の人生経験からうちだされる哲学では、“Crazy Jane Talks with the Bishop” で主張されるように、愛は性的であるべきであり、“Nothing can be sole or whole / That has not been rent” (17-18) というように、Bishop とは反対に肉体にも重きを置くものである。このことについて、まず “Crazy Jane and Jack the Journeyman” における光と闇のイメージに注目しながらその意味するところを考えてみる。

I know, although when looks meet
I tremble to the bone,
The more I leave the door unlatched
The sooner love is gone,
For love is but a skein unwound
Between the dark and dawn. (1-6)

第一連で、Jane は愛がはかないものであることを歌い、娼婦である彼女の家に男たちが来ては帰っていく姿が描かれている。“the door” と “a skein” には、頭韻を踏んでいる “unlatched” と “unwound” がそれぞれ係っており、共に肉体を象徴していると考えられる。そして “Between the dark and dawn” とあるように、「夜だけ欲望にまかせて男たちはやって来ては帰っていく、愛とはなんとはかないものか」という Jane の愛に対する認識が強調されている。また “bone” と “gone” が韻を踏んで、その肉体が mortal で

あることが暗示されている。つまり、この連では肉体的愛のはかなさが描かれ、夜のイメージが支配的であるといえる。

一方、第二連においては霊の世界が描かれるようになる。

A lonely ghost the ghost is
That to God shall come;
I — love's skein upon the ground,
My body in the tomb —
Shall leap into the light lost
In my mother's womb. (7-12)

「死者は神のもとへ行き、その魂は救われる」というキリスト教的教えに従う霊は「寂しい霊」であるが、Jane はそうではない。なぜなら、Bishop が手にしている聖書が “an old book” (“Crazy Jane and the Bishop,” 12) としてしか認識されないように、もともとキリスト教的信仰は、彼女にとっては何の意味も持たず、Jane が信じるものは彼女自身の人生経験で得てきた肉体を伴った信仰でなければならないからである。“Crazy Jane and the Bishop” の中で、彼女の恋人 Jack はすでに死んでしまっていると設定されているが、Jane と Jack を結んだ「愛のかせ」である体は、死後、墓の中に入り、彼女は “the light lost / In my mother's womb” へと飛び込むのだと言う。この「光」とは、一体何を意味するのか。第一連では、夜のイメージ、つまり闇が支配的であり、描かれていることは現世の Jane の愛であった。そして、第二連においては死後の世界が描かれ、そのことを “leap into the light” と表現している。さらに、この連において “tomb” と “womb” が韻を踏んでいることに注目すると、その「光」とは死後の世界に存在するものであり、かつ一個の存在が誕生する前、つまり肉体としての生命をもつ以前に存在するものであると考えられる。ここで、第一連において肉体の mortality が暗示されていることと関連させて考えると、この「光」は、この世に生を授かったときに失われるもの、つまり「永遠性」を象徴的に表わしており、第二連で描かれていることは、死後、その失われた「永遠性」へと再び戻っていくということを暗示している。

そして、第三連に移ると、これら mortal な肉体と死後の永遠性を統合した Jane の思想が読み取れる。

But were I left to lie alone
 In an empty bed,
 The skein so bound us ghost to ghost
 When he turned his head
 Passing on the road that night,
 Mine must walk when dead. (13-18)

たとえ空のベッドに一人取り残されても、つまり恋人が亡くなって、この世に一人で取り残されても、「愛のかせ」である体が二人の霊をも強く結び付けてしまったので、死後、Jane は一人寂しく神のもとへは行かず、やはり体が結ばれたように Jack を求めて地上を歩かなければならないと考えるのである。16, 17行目は、死の世界へと向かう Jack の姿が描かれているだけでなく、1行目の“*When looks meet*”と呼応し、また“*Crazy Jane on God*”の最終連で描かれる男たちが Jane の体をまるで“*road*”であるかのように行き来する(“*pass*”)イメージを併せて考えると、「この世で二人が結ばれた時」と解釈することができる。そして18行目では、霊が“*walk*”という動作動詞を伴って肉体を併せ持つものとして描かれるのである。

ここで「永遠」と「無常としての時間」という抽象概念が具体的イメージで、簡潔かつ大胆に描かれている“*Tom at Cruachan*”を見てみる。

On Cruachan's plain slept he
 That must sing in a rhyme
 What most could shake his soul:
 'The stallion Eternity
 Mounted the mare of Time,
 'Gat the foal of the world.'

6行という短く率直なこの詩において、二つのことが指摘できる。第一に、“*the world*”は“*Eternity*”と“*Time*”の結合から生まれたものとされている。つまり“*the world*”はそれぞれの性質を備えているのであり、決して“*Time*”と一致するものでもなければ、“*Time*”のみから生じるものではないということ。第二に、最後の行だけ韻が移動し“*soul*”は“*world*”ではなく“*foal*”と韻を踏んでいるという点から、“*soul*”は単独では“*world*”

とは一致せず、肉を伴って生まれる“foal”と一致するということである。したがって、“the world”における“Eternity”と“Time”の共存、そして同時に“body”と“soul”の融合を歌っていると考えられるのである。

これらのことを踏まえ、なぜ Jane があんなにも肉体の結びつきを強調するのか、“Crazy Jane on God”において考えてみる。この詩で Jane の体を“like a road” (20) といっているのは、単に男たちが娼婦である Jane のところに、無遠慮に来ては帰るという理由からだけではない。

That lover of a night
 Came when he would,
 Went in the dawning light
 Whether I would or no;
 Men come, men go;
All things remain in God. (1-6)

第一連において“*That lover of a night*”は、今まで見てきたように「夜の恋人」というだけでなく、「この世で結ばれた恋人 Jack」であり、時制から「過去の恋人」であることがわかる。また“*Went into the dawning light*”から永遠の「光」、つまり死後の世界へ逝ってしまったことも暗示される。そして、“*Men come, men go*”という Jack の描写に用いられた動詞 (“*Came,*” “*Went*”) の現在形を使うことで、それらはより強調され、過去にあったのと同じ現象が現在にも繰り返され続けていることが示されている。短い言葉で淡々と描かれるこの連からは、“*he would*”と“*I would or no*”という対比もあり、感情が失われてしまった無感動な印象を受ける。“*All things remain in God*”は、「神」のもとにあって、Jack を失った Jane の悲しみにもかかわらず、無情にも繰り返される日常の様子に対し、過ぎ去って失われていく過去を思い、人生ははかなく残酷であるという Jane の認識がうかがえる。

Banners choke the sky;
 Men-at-arms tread;
 Armoured horses neigh
 Where the great battle was

In the narrow pass:

All things remain in God. (7-12)

今なお続く性愛の現場から戦場へとイメージが移行し、やはり繰り返される歴史へと視野を広げている。この連においても、動詞の時制の違いから、過去に起こったけれども、すでに終わってしまった戦いが現在も同じように展開される様子、つまり今も昔も変わることなく続いている現象について描かれている。しかし、それは chronological な時間という概念を超えたものとなっている。したがって、リフレインは「神」には過去から未来へと過ぎ去り、失われていく時間の意識が存在しないこと、つまり過去と現在の同時性が提示されているのである。

そして、第三連では不思議な現象が描かれるようになる。

Before their eyes a house

That from childhood stood

Uninhabited, ruinous,

Suddenly lit up

From door to top:

All things remain in God. (13-18)

この連では、昔から建っていたが、もう人の住んでいない没落した家に、突然明かりが灯り、過去の栄光が一気に甦る姿が描かれている。これは、アイルランドの伝統的文化、歴史の復活を信じる Yeats の理想と考えられる。また “Crazy Jane Talks with the Bishop” の中で、「醜くなった体をさらすような娼婦としての生活をやめ、身を清めよ」と Bishop が Jane を戒める時に、“some foul sty” (6) という言葉で、住まいである「家」が肉体の象徴として描かれているように、ここでの “a house” もその肉体を象徴していると捉えることができる。つまり “a house” に「光」が灯ることは、肉体の中に「永遠性」が内在することが象徴的に描かれているのである。「神」には失われていく時間という意識などというものは存在せず、全ての現象が常に積み重なって現在にも保たれている。Bishop の説くキリスト教的世界では、人間は神とは違い、その生を受けた瞬間に mortal な存在となり、肉体には永遠なものは存在しないのだが、Jane はそれが存在すると信じているので

ある。

I had wild Jack for a lover;
 Though like a road
 That men pass over
 My body makes no moan
 But sings on:
All things remain in God. (19-24)

最終連でも、動詞の時制に注目すると、過去には Jack を恋人としていたが、今は Jane の体がまるで「道」であるかのように、男たちが来ては帰っていくという、再び第一連と同じような内容になる。しかし、二連目、三連目という過程を踏んだこの連にはもう無感情な姿はなく、全く違った印象を与えている。つまり“sings on”から分かるように、「歌いつづける」という積極的な姿勢がうかがえるようになるのだ。ここで、Jane は自分の体の中にも過去から今でも存在し続けるもの、すなわち、老いた体に内在する若かりし頃の「愛の記憶」という昔から変わらず存在し続けるものを見つけたのである。過去は過ぎ去っていくものだが、肉体は過去を内在させており、肉体こそが永遠なものの存在しないこの世において過去の記憶を留め、積み重ねていくものであり、永遠へと続く「道」なのである。

“Crazy Jane on the Day of Judgement”では、この Jane の愛を次のように表現している。

‘Love is all
 Unsatisfied
 That cannot take the whole
 Body and soul’;
And that is what Jane said. (1-5)

不完全韻も含め脚韻を踏んでいる“all”, “whole”, “soul”そして“Body and soul”のつながりからも分かるように、愛とは、肉体だけ、魂だけのどちらか一方ではなく、またこれらは対立するものでもなく、そのどちらも含んだ全的なものでなくてはならない。なぜなら、この世の愛が成就するのは、性

愛により肉体である「道」にその記憶を刻み込むことによってであり、刻一刻と過ぎていく無常の世界、そして永遠の世界のどちらでも結ばれることによって初めて愛は完全なる一になる。Janeの愛は、今までも、そしてこれから「道」のように続いていくものであり、それは単に現世においてだけではなく、永遠にも通じるものである。すなわち、“All could be known or shown / If Time were but gone” (18-19) と言う時、誰にも邪魔されることなく完全な愛を求める Jane の強い信念が表現されるのである。しかし、皮肉にもそれは仮定法を用いることで、この世でそれを共有し得ない Jane の孤独感をも表わしている。

III

以上のように、Crazy Janeの信じる愛は“Eternity”と“Time”, “body”と“soul”という相対立する二つのものを共存させ、その境界を溶解させるものであるが、同時に、愛それ自体も憎しみと表裏一体であることが“Crazy Jane Grown Old Looks at the Dancers”で認識される。

I found that ivory image there
 Dancing with her chosen youth,
 But when he wound her coal-black hair
 As though to strangle her, no scream
 Or bodily movement did I dare,
 Eyes under eyelids did so gleam;
Love is like the lion's tooth.

When she, and though some said she played
 I said that she had danced heart's truth,
 Drew a knife to strike him dead,
 I could but leave him to his fate;
 For no matter what is said
 They had all that had their hate;
Love is like the lion's tooth.

Did he die or did she die?
 Seemed to die or died they both?
 God be with the times when I
 Cared not a thraneen for what chanced
 So that I had the limbs to try
 Such a dance as there was danced —
Love is like the lion's tooth.

Jane は “They had all that had their hate” というように、踊る男女それぞれの中に互いに対する “love” と “hate” という相反する感情を見出している。これについて、Richard Ellmann は “dance” というこの詩に一貫したモチーフを “the sexual act” と重ねて次のように述べている。

To Crazy Jane the dance both represents the sexual act symbolically and also is the sexual act itself. Like Wilde, who saw the lover as murderer, and beyond Baudelaire, who had declared that victim, Crazy Jane sees that both parties play both roles and that hatred is the key to love.⁷

“dance” のモチーフで示される男女の愛は、Jane が主張した “Nothing can be sole or whole / That has not been rent” という性愛と呼応する。そして、この詩では “the sexual act” の中に “love” とは反対の “hate” という感情に起因する要素が見出されることが示されている。また “the sexual act” は、その暴力的行為故に “death” のイメージを伴い、さらに “dance” で表象されることにより、生の躍動感が表わされると共に、“d” 音の畳み掛けるような繰り返しから “death” とのつながりがより鮮明に表現される。第一、二連で、男女それぞれが “murderer” と “victim” のどちらの役割も担うよう描かれているのは、性愛には “love” と “hate” という両方の激しい感情が作用しているからであり、それらはどちらか一方にあるのではなく、また欠けているのでもなく、互いがそれぞれの感情を持って成立するからである。Jane が若い男女に見出したものは、彼女の考える愛の姿まさにそのものであり、“love” と “hate” の同時発生的状態としての “sexual love” を、そして「生」に潜む「死」の姿を “dance” で象徴的に表わすことによって、この詩は愛の多面的見解を見事に描いているのである。各連の最終行にあるリ

フレインでも“l”音の頭韻を伴った快い音楽性と“*the lion's tooth*”という一見奇妙とも言える具体的比喩を提示することで、愛における優しさや甘美さと共に、それとは裏腹の凶暴さや残酷さを象徴的に表現しているのである。

また、この詩は様々な対比を浮き彫りにし、コントラストを利かせたものとなっていることが指摘できる。年老いた Jane が若い男女の踊る姿を見ているという設定から、まず Jane の「老い」と男女の「若さ」という対比が浮かび上がってくる。これらに“ivory”と“coal-black”や“gleam”で表わされる対照的な色合、加えて男女の“dance”という「動」に対して身動き一つできない Jane の「静」を重ね合わせることで、Jane と若い男女の違いはより一層際立ったものとなる。第一、二連はこの違いを強調させながら進行していくが、第三連に移ると、今まではっきり見えていたものが煙に包まれたように曖昧になる。そして、若い男女に向けられていた焦点が Jane へと移り、17行目以降では Jane 自身の中にそのような激しい感情や若さがあったことを、この男女と同じ“dance”のモチーフから連鎖的に思い出している姿が描かれる。つまり、Jane と若い男女の間における多くの違いと思われていたものが、Jane 自身の中に集約され、Jane の中にも存在していたものとして示されるのである。すなわち、Jane が若い男女に見たものは、同時に自らの中に存在していたものを映し出したものであることが明らかになるのである。このように一般的に相反するとされるものは、“love”と“hate”のように同時に存在し、また Jane と若い男女の間に示されてきた様々な対比のように、それらは鏡のように互いを映し出しているのであって、互いを認識するために必要とし合うものなのである。このような Jane の愛の認識について、Ellmann が“*She [Jane] shares his [Yeats's] theories about love, and sees it as a conflict of opposites but as an escape from them to unity, wholeness, or, to use a word which she would not have used, to beatitude*”⁸と述べているように、これらの詩において、相対立するものが一つのものの中に同時に存在することは、逆説的にそれら二つとされるものが、実は統合される一つのものであり、相反するイメージを持って認識されることを表現しているのである。そして、この Jane の愛の認識は Yeats の“reality”に対する認識の仕方の基本的姿勢を「愛」という観点から捉えたものなのである。

Yeats はその思想の体系化を試みた *A Vision* の中で“reality”について次のように述べている。

The ultimate reality, because neither one nor many, concord nor discord, is symbolised as a phaseless sphere, but as all things fall into a series of antinomies in human experience it becomes, the moment it is thought of, what I shall presently describe as the thirteenth cone. All things are present as an eternal instant to our *Daimon* (or *Ghostly Self* as it is called, when it inhabits the sphere), but that instant is of necessity unintelligible to all bound to the antinomies.⁹

我々は、違いを認識することによってしか物事の現実を知り得ないのであって、相対立するとされるものは実は目に見えなくとも一つの統合体であり、その構造は“a phaseless sphere”によって象徴されるようなものである。それは、イメージのつながりや記憶の連鎖反応のように、過去も未来も、また相反するものもすべてが現在の一点に集約できることを意味しており、その違いにばかり囚われていては現実のありのままの姿を本当には知り得ないのである。そして、この究極の“reality”とは、現実そのものの姿だけでなく、想像をも含むものであることが、最後に位置する“The Delphic Oracle upon Plotinus”の中で認められる。

Behold that great Plotinus swim,
Buffeted by such seas;
Bland Rhadamanthus beckons him,
But the Golden Race looks dim,
Salt blood blocks his eyes.

Scattered on the level grass
Or winding through the grove
Plato there and Minos pass,
There stately Pythagoras
And all the choir of Love.

第一連では、Plotinus が海にもまれ、もがき苦闘する姿が“b”音の繰り返しのより効果的に表現されている。彼は、穏やかな Rhadamanthus に手招きされ、そこを目指すが、海の荒波に阻まれ、目指すところに見えていた the

Golden Race も次第に見えなくなっていく。しかし、第二連では偉人たちが牧歌的雰囲気醸し出す自然の中で愛を合唱する姿が描かれる。これは題名からもわかるように、未来において Plotinus が辿り着く場所を描いたものと考えられるが、同時に第一連で “Salt blood” に視界を遮られた Plotinus の想像であるとも考えられるのである。つまり、彼の現実の姿とは、苦闘の真っ只中に身を置きながら、未来を想像し、それに向かって積極的に近づこうと働きかけている姿であり、第二連で描かれているのは、彼の想像する理想ともいえるのである。Yeats にとって、彼の苦闘する姿はもちろん、理想であると捉えられるこの想像さえも、やはり現在の一点に集約される “reality” であり、想像や情緒、過去も未来も含めすべてを包括するこの究極の “reality”こそが、Yeats の考える本来あるべき実在の姿、いわゆる “Unity of Being” なのである。

我々は常に、経験と記憶に基づき、想像を働かせ、その “reality” を捉えようと試みる。しかし、理性に囚われた現代人の価値観では、何かを拒み、否定していくことに心を奪われ、現実をあるがままに知覚することができず、真実を容易には受け入れられない。これに対して、Yeats の詩はその堅固な理性や価値観をも打ち破るエネルギーに満ちており、序文で彼自身が述べていたように “the uncontrollable energy and the daring of the great creators” に影響されたような力強さを備えている。それは、抽象的観念や事柄をただ主張するのではなく、具体的事物やイメージを提示することで、読者の内に失われつつある想像力や情緒を喚起させる言葉の象徴的力であり、それを認め、巧みに操る詩人の詩的、魔術的力であるといえる。この詩集は、全体を通して「愛」をテーマとしているが、その背後にはすべての境界を溶解させる Yeats の “reality” 観が存在しており、詩集全体が様々な現実的局面を捉えながら、そのすべてを内包する一つの象徴的 “the choir of Love” であるといえるのではないだろうか。

Notes

1. W. B. Yeats, *Collected Poems* (London: Macmillan, 1950) 537.
以下, 作品からの引用はすべてこの版に依る。
2. T. S. Eliot, *On Poetry and Poets* (London: Faber, 1957) 257.
3. Eliot 255.
4. Cf. Richard Ellmann, *The Man and the Masks* (London: Faber, 1961) 261.
5. Cf. Daniel Hoffman, *Barbarous Knowledge* (London: Oxford UP, 1967) 46-54.
6. Cf. "Literature differs from explanatory and scientific writing in being wrought about a mood, or a community of moods, as the body is wrought about an invisible soul" ["The Moods," *Ideas of Good and Evil* (London: The Shakespeare Head, 1903) 213].
7. Richard Ellmann, *The Identity of Yeats* (London: Faber, 1964) 164-170.
8. Ellmann, *Man and Masks* 273.
9. W. B. Yeats, *A Vision* (London: Macmillan, 1937) 193.

Synopsis

Organic Images and the Fusion of Antinomies in *Words for Music Perhaps*

Naomi Miki

Words for Music Perhaps consists of 25 short poems: seven about Crazy Jane, three about Old Tom and 15 others. Some particular personae and storytellers are adopted in almost all the poems in this collection, and symbolical images connect each poem with rhymes. Moreover, strange and impressive refrains, though they are meaningless and ownerless at a glance, gradually have a great power to tell the truth.

“Mad as the Mist and Snow,” which is the earliest work chronologically, dramatically presents the process that intelligence is never totally to be discriminated from madness. This situation between indistinguishable opposites identifies the basic mood throughout this collection.

Through the conversation with the strict bishop with his partial ideas, Jane, being crazy, articulates a unique thought not based on any particular religion which separates soul from body; she follows her own experiences with a powerful, concise and rhythmical voice. Tracing the images of light and night makes it clear that she finds out the unity of this world and the eternal world in her memory with her true love, wild Jack. This idea can be attributed to her recognition of love that “Nothing can be sole or whole / That has not been rent,” that is, all things on love that seem antinomies fuse together in her body “like a road.”

Then, while dreaming of the image of the young man and woman dancing, Jane discovers that both of them express their love and hate simultaneously in the dance that indicates sexual love. She understands that opposites reflect each other like a mirror so as to be aware of the other by her remembrance of

her youth with the motif of dance, in spite of the striking contrast between her and this young couple.

Jane's view of love corresponds to Yeats's fundamental attitude towards "reality." We cannot see nor know the nature of reality without perceiving differences between antinomies. All antinomies, however, merge into one symbolized by Yeats, as "a phaseless sphere" beyond the restriction of time and human consciousness.

From this perspective of reality, each poem has its own organic images in order to reconcile antinomies in the human mind. Presenting not abstract concepts but symbolic articulations, Yeats shows us the unity of opposites over the borderline between them, and leads us to the nature of reality and the general truth.

This series of poems, in which each persona sings of his or her love from his or her point of view, symbolically represents "the choir of Love" through the stages of various aspects of love.